

## 第二 教祖靈的人格の實質

## 一、緒言

頌して曰く譬へば西に日は入るも、光は月に映る如と

無量壽王の日光は、牟尼滿月に輝やけり

無量壽如來の光明は永しへに照せども、我ら無明長夜に眠るものに在りては見ること能はず。されど、東の天に皎々と照らして、永夜に彷徨よふ吾等衆生に、永遠の光明を與へ給ふは滿月なり。其滿月に譬へらるゝ教主は、釋迦牟尼佛として世に出で給へり。

我ら衆生は無明の長夜に眠りて、直接に彌陀の日光を見ること能はざれども、しかも其光は此世に現はれ給ふ。釋尊は淨滿月の如くに照らして、我らに教化の光を與へ

給ふ。満月の光は即ち西に在る日の反映なり。教祖釋尊の圓滿なる靈格の光を見れば淨界に在ます彌陀常照の光明を想像するを得べし大經の序分に「爾時世尊、諸根悅豫恣色清淨、光顏巍巍」と靈的人格を表現し給ひしは、彌陀の光明を受くれば誰しも斯様に成り得らるゝを以て、此より説き示す彌陀の眞理を聞きて如説に修行し、汝等衆生も永遠の光に依て復活せよと、教祖が人格を以て其範を示し給ふなり。

此大意は、本來衆生は皆な佛性即ち佛に成り得らるゝ性を有せり。然れども無明の爲に黒月の如く、少分も光を現すこと能はず。月は本と光なけれども、日光を受くれば照輝く如くに、衆生の月は彌陀の日光を受くれば、受し丈に光を現はすなり。月が新月より次第に進みて満月と爲る、末だ信仰に入らざる凡夫は黒月なれども、仄かに靈光に觸るれば初發心の菩薩となり、新月より満月に至る迄の行程を、菩薩五十二の階級とし、全く淨満月と顯はるれば、即ち諸佛の正覺と爲るなり。

いま教祖世尊は、光顏巍巍々と満月の姿を示し給ふ。觀音勢至文殊普賢等は、十四夜

の月にて、諸宗の祖師や宗教界の偉人等より、初心の輩に至る迄、各階級に亘りて光明生活に入りし人は、分々に光を受けし月と云ふべし。

更に譬を以て之を明さば、彌陀は心靈界の太陽に在ます。若し太陽なかりせば、地上の生物は生存する能はざる如く、彌陀の光明に依らざれば、衆生の靈性は活存すること能はざるべし。

又太陽には光熱化の三能ある如く、如來に智慧と慈悲と威神との三能力ありて、衆生の心靈に被らしむ。此光に觸るれば人の靈性を開く。其光に充されし精神が即ち靈格なり。太陽の光が金剛石に反射する如く、人の精神に輝く力は彌陀の靈格なり。人の心靈に此光明が現るゝ時は、知力には知見の悟と爲り、感情には歡喜妙樂と感せられ、意志には最高の道徳と爲り、一切の萬徳は悉く此靈より發現す。

要する處、宗教は此靈光を獲得し、靈的人格を作り、最善の努力を以て、自己の天分を全ふするにあり。靈光は永遠不滅なれば、現在を通じて盡未來際に亘れり、此靈

光が完全に顯はれし處を、即ち淨佛國土と云ふ。

教祖世尊は斯靈光を衆生に教へ、一切を化せんが爲に此世に出で給へり。一代五十年に亘れる教化中、最も出世の本懷を顯はし給ひしは此經なりとす。故に自己の靈的人格を標榜として、衆生を此光明の下に誘導す。實に釋迦出世の本懷はこゝに存するなり。依て斯經の序分、教祖の人格現に就て説明を試みんとす。

## 二 實 質

(イ) 靈格の表相。大乘佛敎の釋尊は大哲人たると共に大宗敎家なりしなり。華嚴及び法華經等の敎主としての釋尊は、實際哲學の方面より眞理を悟る道を示され、無量壽經は宗敎の敎主として宗敎の模範を垂れ給へり。例へば地上のあらゆる生物は天の太陽の光と熱とを被むらざれば生活し得ざる如く、一切衆生は本來佛性を具すれ共、心靈界の太陽たる無量壽如來の光明を被むらざれば、靈き生命と成り靈き人と成るこゝ

とを得ざる所以を、教祖自身が無量光如來の光明に充されし御相を表はし、然して誰人も斯光明を獲れば如斯き驚き人格と爲るを得べしとの範を示し給ふ。即ち經に

爾時世尊、諸根悅豫し姿色清淨にして光顏巍巍たり、尊者阿難、佛の聖旨を承て即ち座より起ちて、偏袒右肩し、長跪合掌して佛に白して言さく今日世尊諸根悅豫し姿色清淨にして、光顏巍巍たること明淨なる鏡の影表裏に暢るが如し、威容顯曜にして超絶し給へること無量なり。未だ曾て殊妙なること、今の如くなるを瞻上らぶりたり。

斯文は教祖の内に充ち給へる靈が、容貌に表現したることを述べたり。釋尊の御眼や御口等のすべてに渡りて、悦びに充ち給へる即ち姿色の清淨なること、光顏の威嚴めしきことの表情は、靈に充されし相となり、内に悦あれば容貌外に現はると云ふべし。

此に先だちて釋尊が彌陀三昧に入り給ふ。然る時に彌陀の日光は釋尊の淨滿月に反

映して、即ち斯表相となりて現はれしなり。是れ釋尊の内心に感したる所自然と表に輝き出でしなり。釋尊の感情が彌陀の靈に充たされ、歡喜妙樂が全體の悅豫と現はれる感覺の靈感清徹せる所姿の清淨と現はれ、智慧と意志との神聖にして侵すべからざる威嚴が、光顏の巍々と現はれしなり。實に言葉に盡きせぬ釋尊の御姿の内容は、矢張り淨界に在ます彌陀の靈光なりと云ふべし。恰も滿月の光りは太陽より受けしそれの如し。故に阿難が聖意を承て申上げし語に、「世尊の諸根の悅豫光顏の巍々たることは、明淨の鏡の影が表裏に暢る」と、釋尊の心の鏡に彌陀の靈が映現したるなり。是れ教祖がすべての信ある人に範を示し給ひしものと思へば、教祖の内容はいかゞ感ずらん。我等はいかに心の内容實質を養成せんとするか。

(口)靈格の内容。前には教祖の表に現はれし相は、内彌陀の靈に充たさるゝ故なることを明せり。斯の如きの表現には、必ず内容の靈的實質なかるべからず。是を經に教祖の内容を五分類として、心相を示し給ふ。阿難の言く

唯然り大聖我が心に念言すらく、今日世尊奇特の法に住し、今日世雄諸佛の所住に住し、今日世眼導師の行に住し、今日世英最勝の道に住し、今日天尊如來の徳を行じ給へり。去來現の佛、佛と佛と相念じ給ふ、今の佛も諸佛を念じ給ふこと無きことを得んや。何が故ぞ威神の光々たること乃ち爾るや。

淨界の彌陀の日光が、之を人佛釋尊の満月に映現したる五つの靈徳とすればいかに配すべき

(一) 今日世尊奇特の法に住す。彌陀の清淨光が釋尊の威覺に映じたるものとす。奇特の法とは、彌陀如來の清淨光が、釋尊の六根清徹なる金剛石に映じて、眼耳鼻舌身の六根が、肉天法慧佛の清淨となりて、即ち二十五根清淨となり、二十五清淨なる時は十方三世一切の國土身心として清淨ならざるなし。故に奇特希有不可思議なり。

(二) 世雄諸佛の所住に住す。釋尊が彌陀の歡喜光裡に安住する相なり。凡夫の感情は弱し、喜怒哀樂の八風に搖がされて、自分自身自己を制すること能はず、隨分豪傑と

云るゝ大將も、一朝の怒に朝敵となる。三軍を叱咤する將帥も、蛾眉の愛には溺る。況んや平凡の凡夫に於てをや。感情としての大雄者釋尊の如き未だ曾て有じ。王位も富貴も釋尊の心を奪ふこと能はず。魔女の魅妖を以ても毫も世尊の情を搖がすを得ず之れ彌陀大我の中に安住する故に、心靈は歡天喜地一切の妙樂に充滿すればなり。世に吹き荒む八風も之を如何ともすること能はず。

(三) 世眼導師の行に住す。是れ彌陀の智慧光が釋迦の智力に現はれて、世の一切の眼と爲て如實の道に導びく。世界一切の人類は心靈の盲目にして、人生歸趣の如何を見ず。俗諦因果の理を辨へずして、惡を作して惡道に、善を作して善所に越くことを知らず。況んや永遠の光明なる涅槃の常樂に歸する道に於てをや。若し世眼世に出まますば、一切の人類は闇より闇に入りて、一人も道を得る者あらざりしならん。釋尊は彌陀の智慧光を以て、一切の衆生を光明界裡に導き給ふを以て導師の行と云ふ。宗祖は我日本人民を淨界に導く眼なり。若し宗祖出でまさすば、諸の群生は、只現在の欲



に盲くらしいて、己おのが永遠えいゑんを知らず、悉ことごとく三惡みくの闇やみに入るべきを、宗祖しゆそが淨土じゆつどの門もんを開ひらき  
て、永遠えいゑんの光明くわうみゆうに導みちびき給たまへばこそ、智慧ちゐ第一だいいの譽ほまれあれ。所以ゆゑある哉や。

(四)世英せゑい最勝さいしやうの道だうに住す。彌陀みだの不斷光ふだんくわうは人佛にんがつの意志いしに受うけて最勝無上さいしやうじやうの道德心だうとくしんと爲な  
る。意志いしの最もつと鞏固きやうこなる、世よの最勝さいしやうの道德だうとくを世英せゑいと云ふ。道德だうとくの動機どうきに四階しがいありと云  
ヅントの説せつは、道德だうとくも不正ふせいを行おこなへば世よの信用しんようを失うしふ、之これを怖おそれて惡事あくじをせざるは低ひくき  
道德だうとくにて、次に他たに教おしへられし儘ままに作なさざるは其上そのうえにて、自己じこの良心りやうしんより出いづ善ぜんの行かう  
爲なすは其上そのうえにて、最高等さいがうとうの理想りやうきやう、即神すなはちかみの聖意せいぎより自己じこの意志いしに出いづるものは最上さいじやう  
の道德心だうとくしんなりと云ふ。例れいせば人天的にんでんてきの道德だうとくと、二乘じじやうの眞空しんくう的てき道德だうとく、乃至佛陀ふつたの道德だうとくと  
を比較ひかくせば、佛陀ふつたの無上道心むじやうだうしんより出いづる道德心だうとくしんは、絶對無上ぜつたいむじやうの道德だうとくなり。故ゆゑに最勝道さいしやうだう  
なりと云ふべし。

(五)天尊てんそん如來にょらいの德とくを行おこなす。本佛彌陀ほんぶつみだ萬德圓滿まんとくまんげんの光くわうは、人佛釋尊にんぶつしやくそんの身みに現あらはれて本佛如ほんぶつにょ  
來らいの德とくを行おこなじ給たまふ。即すなはち釋尊しやくそんは十八不共じふはちふくぎの德とくを以もつて、身みの行爲かうゐ口くちの言語ごんご、意いの思想しゆきやう、

この三輪完全にして一の缺點なきは實に滿月の如く、然して佛陀が衆生に教へ給ふ本懷は、一切をして彌陀の光明に攝化せられ、靈き人と爲りて如來の聖意を我意とし、最善の努力を盡すを以て、人生の一大事なりと教へ、尙自ら模範を示し給へり。

(六)釋尊が彌陀如來を念すること、釋尊の奇特法より最勝道に至るまでの五靈徳は、本佛彌陀の映現なりとは銘文あり。我れ曰く經說なり。即ち次の文に「阿難の言さく今佛如來もまた他の如來を念じ給ふや、或は不思議にも、平素と異なる威神光々と、現はれ給ひしにや」と釋尊に問上るに、釋尊は阿難を稱めて「汝ちは能くも我が心を知り得たり、實に然り」と、是れ今佛釋迦が、本佛の彌陀を三昧定中に念じ給ふなり恰も日光が滿月に映現せしが如し十方三世一切諸佛、悉く無量光の名を稱へて咨嗟せざるはなし。十方諸佛悉く聖名を稱へて彌陀を念す。今佛釋尊焉ぞ名を稱へ念せざらんや。彌陀を念するが故に、彌陀も念じて人佛に顯現す。故に釋迦は人界の彌陀にて、彌陀は淨界の釋迦に在ます。仰いで信すべし。

### 三、化用

(イ) 釋迦出世の本懐。大乘の佛典の中、法華華嚴等の經は、釋尊が大哲人として、自己冥想中の經驗を説て、諸の大菩薩等をして、三昧理想の境に遊ばしめんが爲めなり。然れども宗教の意義を以ては、華嚴に普賢行願の所有功德を回らして、阿彌陀佛を見て、安樂刹に往生せんことを願はしむ。

無量壽經は釋尊が全く大宗敎家の眞面目を現はし、自身は人佛にして無量壽如來の威神光明最尊第一にして、諸佛の光明の及ぶこと能はざる所、乃至彌陀は大慈悲の父なりと敎へて、一切聖賢乃至一切衆生を、悉く此一佛に歸せしめ給ひしは、恰も猶太のキリストが天に在ます父に祈らしめしが如くなりき。今經には宗教家としての釋迦本佛彌陀の大慈悲を以て我意とし、三界の衆生を矜哀して此世に出まし、光く道敎を聞きて群萌を拯はんと欲し、歸する處は彌陀の眞實の利を以て、一切衆生を大慈悲の

光明に攝取し、無限の光と無限の壽とに、歸入せしめんとするの聖意に外ならず。一切衆生は佛性の卵なり。如來大慈の懷に攝められて孵化するにあらざれば、佛性顯現し難し。大慈の光明を以て一切を開化す、此れ釋迦出世の本懷なり。

(ロ) 出世本懷の二。靈の人格此世に出で給ひし本意は、一切衆生の佛性を開き、煩惱を靈化して聖き人と爲さんが爲にて、法華は諸佛如來の一大事因縁を以ての故に世に出現す。一大事因縁とは衆生の佛知見を開示して、佛の正道に悟入せしむるにあり。彼は佛性を開くに哲人的に智慧を以て悟入せしめ、今經は宗教的に大慈愛を以て靈き子を育みて佛と爲さしむ。通じて大乘佛敎の教化の目的は、大慈父が衆生てふ子をして父の如き全き成佛をなさしむるにあり。一切衆生悉有佛性、衆生悉く靈性を具有し乍ら、煩惱の殻中に伏在す、恰も鶏の卵の如し。之を煖めて孵化するに非ざれば佛心顯れず。靈性開顯せざる間は煩惱我が主人となりて我儘を働く。佛性を開發するは例へば教育にて知能を啓發する如く、佛性を煖めて開發するは彌陀の慈愛の懷に攝取

せらるゝにあり。唯念佛のみ有りて佛子の卵は孵化せらる。靈性が顯はれる時に煩惱は其質を變じ、從來惡用し來りし貪瞋も今は善質に靈化し、強欲の心も變じて衆生を助けたいと云ふ善さ欲望と爲り、自己の惡を呵責する奮怒となり、煩惱の澁も變化する時は甘き干柿の實と爲る。

(ハ) 靈格の活動。釋尊が一生涯を通じて、八相成佛の化用、即ち御一代の働きは、唯一切の人類の靈性を開き、惡を善化し靈き人として如實の生活に入らしむるにありしなり。經に「今我此世に於て作佛して教を施し道を宣布し諸の疑を解き、迷の本を抜き衆惡の源を杜ぎ、人生の歸趣を明にして未度の者を度し、生死に迷ふものをして永遠の光明に入るの道を決定せしむ」と。已に東天に旭宇が昇りて世が明く爲れば衆生は安心して自己の業を勵むべし。佛陀の日が世に出で、すべての心靈を安んぜしむ。釋尊は終り涅槃の夜半に至る迄、生涯に亘りて飽くまで奮闘して休み給ふこと無かりき。我朝の釋迦即ち宗祖御一生の間、淨道の爲に盡瘁なされしことに彷彿たり

(二)靈的生活。初に靈の養分。例へば肉體の生活には必ず肉體を組織する營養分を要する如く、靈的生命にも糧を要すべし。曰く肉體を健全にして働くには隨て營養に富める食物を攝取するが如く、靈の生活には殊に養分の糧の缺くべからざるものあり經に、

佛陀は智慧無礙にして能く遇絶すること無し、一食の力を以て能く壽命を住めしむること億百千劫無數無量にして、復た此に過ぎたり。諸根悅豫して以て毀損せず、姿色不變にして光顔異なること無し。所以は何ん。如來は定慧究暢して極りなし、一切の法に於て自在を得たり。

靈の養分とは一食の力にて靈の生命を保存す。其養分とは甘露不死の靈食にて、アミトは是れ諸佛の食物にて諸佛はアミトに依て無量の壽を保つ。キリストが「人はパンのみにて生くる物に非ず、聖書は心靈の糧なり」と。彼已に爾り、況んや大乘の佛教に於て、何ぞ靈を養ふの糧を與へざらん。五戒を完全に守りて人格の核を爲さ

ば人間の生命を保つ。真空無爲の靈核を爲さば聲聞の生命を保つ。大菩提心の靈核を生命とすれば眞の佛子となるなり。釋尊は彌陀の大靈と連絡せる靈を常恒に享受しつゝあり。妙味念念に養はれ、肉の生命が糧と滲氣とに養はるゝ如くに、アミリトを靈の糧とす。其味微妙不可思議なり。獨り釋尊が自味自知し給ふのみ、我等とても佛陀の賜なる念佛三昧により、念念の中に法喜禪悅の妙感、窮りなきを感ずる事を得べし。次に靈の生活。釋尊はアミリトの糧を以て、法身慧命を養ひ給ふが故に、諸根即ち眼耳等を始め、身體中の各部は悦豫に充たさる。是れ彌陀の靈が釋尊の生命を成すればなり。姿色不變光顏無異の内容が、表に現るれば金色なり。全體黄金は自分より鎔を生ぜず。釋尊は彌陀を我中心精髓として内容の實質に充たさるゝ故に、外界より來る云何なる迫害にも驚動せず。又稱讚にも搖がされず。然るに概して人は外部より來る毀譽褒貶の風に、内心が煽がれて、或は喜び、或は怒り、或は怖れ或は悲しむ。其内心の動搖は、忽ちに感情と爲り血眼となり、又は青ざめ坏して種々に姿色を變態す

是は內的實質に於て、金剛の如き靈を中心とせざればなり。我朝の釋尊たる宗祖は、山門大衆の迫害に遇ふも、無期徒刑の宣告に臨みても、從容自若泰然として山の如く動かされ給はざりしは、彌陀の聖意を以て我意とし給ひしに依る。言ひ換ふれば靈を以て實質と成し給ひしなり。

釋尊が舍衛國祇園寺に在して教化し給ふ折、六師外道等が釋尊の化導を妨げ諸の信者の歸依心を毀たんとして女旃荼彌に謀る。彼女容貌端正人を魅すに甚だ巧みなり世尊説法の會に入り、百千の大衆を別けて御許に到り、即ち言はく、我輩よ、我妊娠して臨月近づけり、何ぞ自分の家庭を省みざる、自から修まらずして焉ぞ衆を欺むくぞと云ふ。此體を見たる大衆は奇異の念に耐ざりしならん。時に世尊は從容として、姿色不變光顏彌麗しく、彼を叱咤せず、又敢て辯護もし給はず。時に天の帝釋正法護持の心を以て鼠と爲り來りて彼女の腹中に入り、鉢盂を撃げる緒を噛み切りけるに、鉢盂忽ち地に落ちぬ。大衆一同奮激して外道等が奸策を大に罵しれど、世尊の光



顔は異ること無きに、外道等自ら慚愧に耐へずして其座を退けり。靈的人格の實質は黄金の自己より鑄を生ずること無きが如く、如何なる境遇にも其色を換へざるなり。又或時提婆調達が、阿闍世太子を唆して世尊を謀殺せんとし、矯り請じて城門に入らしめ、當に火坑に陥し入れんとす。其時に世尊從容として笑を含み、口より光を放つ時に阿闍世太子、其慈顔を瞻て改心慚愧して、世尊に歸依せりと。斯くの如く、いかなる境遇にも姿色光顔異ることなきは、内靈に充ち給へばなり、要するに此經の本意は、教祖自ら範を示して、斯教を信する者をして、彌陀の光明に靈化せられて、靈き人格を形成する處にあり。

(ホ)靈の修養法。已に彌陀の靈を糧として、靈的人格の生命を保存し、靈き生活を爲さしむることはほゞ演べたり。然らば其靈の糧を如何にして攝取すべきやと云に付て、經に曰く「如來は定慧極りなし、一切の法に於て自在を得たり」之れ禪定と智慧との三昧を以て、彌陀の靈が我と合して萬徳を我有とす。禪定にて一心靜まる處に彌

陀と合し、其合したる所に如來の萬德を我有として、靈の實質を顯はすは智慧の作用なり。此の定慧を合したる作用が即ち三昧なり。世尊は定を以て彌陀と合一し、智慧を以て、彌陀の萬德を我有として、自ら其德に満ちて一切を教化し給ふ。靈を養ふに例へば、小兒に母乳を哺しめば、乳の中に一切の營養悉く包含するが如く、念佛三昧に依て靈を養へば、養分悉く包含して缺ることなし。随つて自己の靈性が益々發達すれば、三昧中に種々無量の一切の妙味を味ふことを得べし。

願くば賢明なる聖き同胞よ、斯經の宗趣は念佛三昧を以て宗とす。大慈父の靈に養はれて自己の靈に活き、佛祖の靈格を我として、我神に靈き人格を作り、現在を通じて永遠の生命と爲り、彌陀の聖意を以て我意とし、一切の同胞と共に永恒の安事を得んことを期せん。



# 辨榮聖者

木又謹誌

大ミオヤの無盡の大悲に催ふされて、此の土に輝き出で給ひし辨榮聖者は、安政六年二月二十日下總國鷲の谷の念佛者山崎嘉平氏の長男に生を受け給ふ。家に在りて農事に勵み學業を好むこと世の常ならず、十二歳の時彌陀三尊を空中に見て憧憬の念に堪へず、竟に明治十二年二十一歳にして出家の素志を遂げ、近村東漸寺の領學大康上人に師事し、毎夜熟睡三時間の外は雜用に學問に忙しく、貫くに念佛一行晝夜斷え間なく、或時は手の平に油を入れ之に浸したる燈心を燈し、或時は腕の上に線香や蠟燭を燈して佛前に供へ、以てその忍力佛道修行に堪へ得るやを試し給ふ。疾に一切經を讀了し、東京に遊學して卍山上人に就きて華嚴を修めし央ばには法界觀の三昧圓かに現前し、明治十五年筑波山に籠りて至心念佛の曉には見佛三昧了々と發得し給ふ。爾來一舉一動全佛法に相應し、施、戒、忍、進、禪、慧、缺くることなく、大

康上人の意を繼いで五香に新寺創立を志し明治二十七年本堂落成に至るまでは、雨漏る廢家に夜も燈無ければ線香の火を頼りに聖晝を描き、嚴寒にも重ね着せず糞を積んで蒲團となし、超然として勇猛に稱名し給ふ。建立寄附も一人一厘の結縁として遠近を行脚中若し貧窮者に遇へば月日重ねて喜捨を積みし金米全部之に施して更に又一厘より勸進を始め給ふ。途を踏むに蟻は勿論若草までも懇ろに之を避け、大康上人の訃音に接しては即座に追恩別行に入つて不臥念佛一百日に及び給ふ。明治廿七八年印度に渡りて大聖釋尊の御蹟を巡拜し、歸朝しては東西に巡教し阿彌陀經圖繪を施し給ふこと廿五萬餘部、普く米粒名號を施してかりにも一聲稱名の縁を結び給ふ。と實に無數、難化の有縁一人の爲にも數年方便して猶措かず、寺の禮遇を辭り態々下男室に夜を明して勸化の縁を求め、夜寒の町に貧者を訪れては當日供養をうけし下着を脱ぎ與へて如來の大悲を喜びあひ給ふ。日毎夜毎の傳道に疲れし色もなく忙中に僅の閑を得ては如來の尊像教化の御文に筆を運び、汗血のにじむ慈悲の雫が幾千枚、そ

の奉謝の金は悉く會堂の創建となり學園の創立となり數萬の文書數十萬の禮拜儀の  
施本に充て給ふ。食卓の上浴室の中至る所皆説法の道場にて、一所不住の年中巡教  
極寒極熱一日の休養もなき間に宿所の縁に随つては古今の書籍近代科學に至るまで致  
々として研め給ひ又晝、歌、音樂、五筆の書等諸技悉く利生の方便ならざるなし。  
靈應内に満ちて、念々不捨寢息まで自ら稱名する程なりし間にも説法に非れば讀  
書、讀書に非れば書き物、實に一寸の光陰も爲すこと無くして過し給ふことなく、集  
る淨財は悉く利他の用に供へて反古紙一枚をも節約してその裏に原稿を書き給ふ。  
一切の時一切の處、たゞこれ佛作佛行、寸隙なきその御行狀に接しては始め尊大に  
構へし人も皆恭敬して其の教に額かざるなく、諸宗は勿論耶蘇教の牧師に至るまで發  
心してその門に入る。首唱し給ふ光明主義の光り萬民に被る所、念佛三昧各地に盛  
に行はれ入信の行者幾萬皆悉く値遇の御恩を感泣して盡未來際の願行に奮ひ立つ  
越えて大正九年吹雪に更くる北越の夜寒身に泌む勸化の旅に老いの御聲に盡きぬ如來

の御慈悲を傳へて最後の三昧會を木枯悲しき柏崎に導かれ給ひし十二月四日遷化し給ふ。

仰ぎ惟れば内證甚だ深く外用亦廣大に全分度生の無我の力が無作の精進に顯れ給ふ辨榮聖者の御一生は、如來光明のさながらの反映に在せば、誰か大慈悲の靈應を仰がざらむ。誰か光明の攝化を信せざらむ。

## 後記

本年は「現代の釈尊」と仰ぐ大恩師父佛陀禪那弁栄聖者が大正五年六月、浄土宗総本山知恩院に於て夏安居と高等講習会併開の砌、「宗祖の皮髓」と題して講述せられてより満四十周年に当るので之を記念して戒浄上人相伝本を底本とし、之に其の後改版の一言社本、ミオヤの光社本、観照新聞社本を対校して、斯に本書を刊行した次第である。

本書の校合に当っては、相伝本の原形を遺存する事に努めたが、何分共御自筆の稿本が発見出来ぬため、異文や明かに誤植と思われるもの等は出来る限り慎重に之を修正統一する事に意を配し、諸本の異同は紙面の關係上、之を列記する事を控えた。

世上往々、そのかみの「大原談義」に比する此の高等講習会は、初め聖者の講師任命の発表あるや異論頗る多く、囂々の嵐の中に開催されたのであるが、内靈心に充ち給う聖者の慧行双絶の法蘊蔵より迸り出す講説に、遂に喧々の叫びは化して渴仰の歎声と変じ、衆議一決、後世のため之を筆録する事となった。其の講録が後に聖者御自ら筆を執って東西遊履の傍ら添削されたものが、魯魚の校正漸く終り關係者に依つて印行せられたのはその年の暮であつて、之を初版本となし、京都一言社刊の菊版のものである。

此の巻頭、聖者自画自賛の「親縁の図」あり、その裏面に聖者自筆の悲心徹悟の語業があつて種々の口伝と共に戒浄上人に付属されたものが、斯に所謂相伝本である。此を要するに、「安心起行の形式」は之を重んずると共に「起行の用心」をその攝属とせず、「安心起行の形式」と「起行の用心」とを判然と區別して、前者より進んで更に後者を大切なりとする円具光明法門の上より見て、此の御垂示は実に貴重なるものであつて、今その行の配り、振仮名等すべて御自筆に準じて収載した所以である。



尚又、ミオヤの光社本、観照新聞社本に割愛されている本説第二の「教祖靈的人格の実質」は、夫の有名な「釈尊の三相五徳」に関する御説示であり、聖者の幽玄深遠にして内鑑冷然たる同一無量光寿なる弥陀三味の奥底より開闡されたものであって、正に古今未曾有の妙釈と仰ぐべく、吾人は此の御示教を通じて須らく「宗祖の皮髓」は即ち信念上「教祖の皮髓」と同一直線上のものとして所謂理感二性を統一調和した円具教光明主義の本質立義に直到す可きを思うのである。

尤も、一音社本には何版であれ、先に宗務所等に抗議の先頭に立った時の知恩院法教科長井上（後に漆間）徳定師の随喜溢るる跋文が添えられてあるが、今は之を省いた。

真に、聖者は一般佛教学上よりは申すに及ばず、浄土教学者としても全く超一流、一頭地を抜いて燦然として輝き給い、過去幾世代に亘る浄土教学上の一大疑団を本書に於て一刀兩断の下に決択せられ、浄土学研究上一新紀元を劃された。然し、其の超勝独妙の御慈教は須らく「衆生念佛佛還念」の真修裡中に読書百遍、初めて教祖釈尊即導空二祖の真精神に直参するを得可く、斯に相共に携えて真実一路靈性を開発し、「果満寛王独了々」の王三昧を発得し乃至成佛せん事を冀求して止まぬものである。

とは申せ、浅学非才にして信外軽毛の吾等、本書刊行の各般に亘って粗笨の点多々あるを懼れる。併し、固より之れ斯教宣揚の微忱に出ずるもの、折角諸先輩の御叱正と御指示を賜れば、幸甚之に過ぎるものはない。

昭和三十一年十二月四日

善孝識

### 覆刻に際して

今年は師父聖者の御高足笹本戒浄上人の五十回忌、又田中木叉上人の十三回忌正当の記念すべき年であるので、聖者御遺文『宗祖の皮髓』を覆刻することにした。その後発見された誤植は今回これを訂正した。

なお、聖堂教学部においては現在『宗祖の皮髓』の諸刊本の本格的校合に努めているので、何れその作業終了の暁は決定版刊行の予定である。

昭和六十一年二月二十日（聖者御降誕聖日）

善 孝

# 光明叢書

— 弁榮聖者御遺文選集 —

1. 安心問答 附 光明主義綱要 (別名 光明へのすすめ)
2. 自覚の曙光
3. 大靈の光
4. 宗祖の皮髓
5. 弥陀教義
6. 礼拝儀要解
7. 永生の光
8. 阿弥陀経図会
9. 十六観相
10. 仏教要理問答

以下続刊

## 宗祖の皮髓

昭和三十一年十一月十五日 改訂初版  
昭和四十年十二月四日 第二版  
昭和六十一年二月二十日 第三版

〔非売品〕

著者 仏陀禅那弁榮聖者  
編者 田中木又上人  
発行者 能見寿作

芦屋市六麓荘町二〇—二〇

発行所 光明会本部聖堂

電話〇七九七(22)四九〇一

振替 京都六一七一九番  
郵便番号 六五九

印刷 (有) 藝林美術出版社